

事業の名称

麦の穂プロジェクト

〔事業責任者〕

(自治体等側)

那珂市教育委員会・教育長 秋山 和衛

(茨城側)

教育学部学校心理学研究室 准教授 丸山 広人

事業テーマ：地域の教育力向上
自治体等との連携

連携先

- ・那珂市教育委員会
- ・那珂市教育支援センター

プロジェクト参加者

- ・丸山 広人 (茨城大学教育学部, 准教授: 企画立案, 指導助言, 総括)
- ・加倉井 正 (那珂市教育支援センター, センター長: 企画, 運営, 全体総括)
- ・打越由美子 (那珂市教育支援センター, カウンセラー: 会計, 庶務, 研究員)
- ・戸倉 花子 (那珂市教育支援センター, カウンセラー: 研究員)
- ・飛田三喜子 (那珂市教育支援センター, 相談員: 研究員)
- ・長津 以子 (那珂市教育支援センター, 相談員: 研究員)
- ・大久保れい子 (那珂市教育支援センター, 相談員: 研究員)
- ・大高 伸一 (那珂市教育委員会, 指導室長: 企画, 運営, 全体総括)
- ・沼田 義博 (那珂市教育委員会, 指導主事: 企画補助, 渉外担当)
- ・臼井 英成 (那珂市教育委員会, 指導主事: 企画補助, 渉外担当)
- ・富山 敦子 (那珂市教育委員会, 指導主事: 企画補助, 渉外担当)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

平成 28 年 3 月現在, 那珂市におけるいじめの認知件数は, 累計で小学校 320 件, 中学校 40 件, 合計で 360 件 (内解消は 345 件, 継続支援 15 件) となっている。継続支援を要する事案の中には, いじめの重大事態のケースにもあたる, いじめが原因での不登校事案 1 件が含まれている。また, 解消はしたものの, その後登校しぶりや学校生活の不安感を訴える児童生徒も増加している。主ないじめの内容は友だち関係のトラブルからの「言葉によるいじめ」が 9 割となっている。

不登校児童生徒の人数は, 平成 27 年度末で, 小学校で 12 人, 中学校 45 名の合計 57 名である。主な要因は「学校生活への不安」が 9 割を越える。具体的には小中ともに学校内での人間関係上の悩みをあげる児童生徒が最も多く, 次いで学習上の悩みなどがあげられる。いずれも身近な生活における問題に対して精神的に疲れ, 心が折れている子どもたちの姿がうかがえる。

これらの実態を受け, 那珂市では「折れない心を育てる」プロジェクトを立ち上げた。いじめ, 不登校事案の解消・改善と合わせて, 友だち同士のトラブルや学習上の悩みに打ちあたったときに, へこたれずに立ち向かったり, しなやかに受け流したりする「強い心」「折れない心」を育成するためのプログラムである。45 分から 50 分を一コマとした対人関係作りプログラム (レジリエンスプログラム) や学校と家庭が連携して行う, 子どもを取り巻く環境改善プログラム (居場所づ

くりプログラム) などである。いずれも、体験活動を中心とした実践的な即効性のあるプログラムである。他にも、支援を要する児童生徒の保護者向けのプログラムも、合わせて実施した。いずれも、不適応に悩む子どもとその保護者に対して様々なプログラムを提供し、心の安定を図りながら、「折れない心」のもととなる夢や憧れ、自信などの前向きな「思い」の育成を目指すものである。

支援の対象は、市内小中学校においていじめや不登校問題等で不適応状態に陥っている児童生徒、または適応指導教室在籍の児童生徒と、その保護者である。

プログラムの推進にあたっては、大学の専門性を全面にいかしながら、地域のボランティアなどの関係機関のもつ力を連携させ、総合的に推進してきた。

本事業は、改善や解消の有効な方策が見出せないでいるいじめや不登校等現代的課題に対し、いじめに負けない、不登校に陥らない強い心を育てるという、攻めの視点からの新たなアプローチであり、有効な打開策となることが期待できる事業である。

②連携の方法及び具体的な活動計画

ア 連携の方法

大学との連携としては、本事業の立ち上げから事業全体の構想、各活動の企画・運営全般に関わった。年間5回、那珂市教育支援センター研修会に参加をし、本事業推進について、随時指導助言を行った。

特に、本事業の中心活動の1つである学校支援活動においては、不登校児童生徒への対応として、未然防止や解消・改善に関して有効な手立てや、学校の支援体制づくりについて指導助言を行った。

イ 具体的な活動内容

i 授業プログラム

一単位の授業の中でレジリエンスを高めるためのエクササイズを実施し、自己の有用性



資料1 【プロジェクト構想図】

や集団への所属感を実感させ、不安や悩みに立ち向かえる心の強さを育成する。

ii 保護者支援活動

不登校、登校しぶりはじめ、子育てに悩む保護者の思いに寄り添い、同じ悩みをもつ保護者をつなぐネットワークを作り、共感的に子育てと向き合える機会を提供する。

iii 学校支援活動

いじめ問題や不登校といった子どもを取り巻く課題の解消について、学校のニーズに柔軟に対応しながら、個別のケース検討や職員研修といった学校支援を行う。

iv 適応指導教室(ひまわり教室)活動

様々な課題に直面し不安や悩みを抱える児童生徒に対し、個に応じた学習環境の提供や小集団による体験活動などを通して、学校生活へのスムーズな復帰を支援する。

③期待される成果

ア 大学がもつ専門の見地からの支援

友だち関係で不安を抱えたり不登校で悩んだりしている児童生徒への対応に当たっては、その心性をよく理解し、配慮を行うことが重要である。そのため、大学がもつ専門の見地をいかし「強くなやかで、折れない心」を育成するプログラム開発や有効性の検証を行うことで、目的達成に向けた効果が期待できる。

また、配慮を要する児童生徒の心理特性や過

去の体験等に応じた具体的な助言・提案を行う上でも、茨城大学教育学部並びに教育学研究科の学生・院生等による人的支援は大いに有効である。

加えて、保護者に対するカウンセリングにおいても、専門的な見地による支援を通して保護者相互の共通理解を進め、心の安定を図ることで、早期の問題解決への期待が高まる。

イ 行政機関からの支援

本市では、学校不適応の解決や未然防止は喫緊の課題であり、大学からの支援・指導を受けながら、不安や悩みを抱える児童生徒及びその保護者への支援に努めていきたい。

そのため、教育委員会は、大学を中心とする関係機関の連携体制の確立に努め、その専門性を大いに発揮できるステージの設定並びに整備を全力で担っている。また、種々の教育理論を検証する実践の「場」として、大学の研究に役立てることを期待し、大学と自治体の地域連携モデルを提案した。



【グループ学習の様子】

相談員からは、出された解消方法に対して、レジリエンスの側面からコメントをし、それぞれの方法にどのような効果があるのか、意味付けを行った。

最終的に子どもたちは、明るく元気な生活を送るためには心の健康が大事であること、そのためには、生活のリズムを整えることや家族や友だちといった自分を支える人たちとの人間関係づくりが大切であることを理解した。

プロジェクトの実施成果

①活動実績

ア 授業プログラムの実践

○那珂市立瓜連小学校5年生保健体育の授業におけるプログラム

～ストレス解消トレーニングについて～

【5年生保健体育1時間扱い】

5年生保健体育「心の健康」の学習において、不安や悩みなどにより、心に負担があるときの解消方法について、レジリエンス理論に基づいたエクササイズを実施した。

当日は、那珂市教育支援センターの相談員がゲストティーチャーとして参加し、子どもたちと一緒に、現代社会の中で子どもたちが抱える、ストレスを解消する方法について考える学習を行った。子どもたちからは、日頃の実体験を踏まえて「運動」「読書」「音楽鑑賞」「睡眠」など、心や体をリラックスさせる具体的な方法が多数考え出された。



【レジリエンスの解説を行う】

○那珂市立芳野小学校3年生特別活動の授業におけるプログラム

～レジリエンスプログラム 友だちと仲良くなるために～

【3年生特別活動1時間扱い】

主に学校生活を送る上で必要なスキルを高め、しなやかで強い心や折れない心を身につけるために、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングの手法を取り入れた体験的活動を行う授業プログラムを

実施した。

今回は「集団で生活するスキル」と「友だちとかかわるスキル」に焦点をあて、それを高めるエクササイズを5つ取り上げた。それぞれのエクササイズには、発達段階を考慮しゲーム感覚でふれあえる活動を多く取り入れた。活動中は、友だちとふれあいを通して楽しさや喜びを共感し、互いの良さを認め合える場面が見られた。

プログラムを実施した子どもたちからは、「みんなが笑顔になれたのが嬉しかった。」「みんなでにこにこしていて、やさしくなれた。」「力を合わせれば、いろんな事ができるんだなと思った。」など、相手の喜びや楽しさを自分の喜びや楽しさと感じられた感想が多く出された。うまくいったこと、いかなかったことも含めて、楽しさや喜びを実感できたことは、集団で自己表出することへのエネルギーになり、自己有用感や自己肯定感を高める素地につながった。

最後には瞑想の呼吸法を取り入れた、マインドフルネスで締めくくった。ストレスを軽減するための効果も期待できる活動である。



【感想を共有する活動】

- 白鳥学園瓜連小中学校防災アカデミーにおけるプログラム

～レジリエンスプログラム お互いをもっとよく知るには～【出会いの場面1時間扱い】

白鳥学園瓜連小中学校で平成28年度より正式にスタートした学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）の事業として、夏休みに白鳥学園防災アカデミーが実施された。

小学生と中学生が4・5名程度のグループを作り、1泊2日で災害による避難生活を模擬体験する活動である。思い通りにならない不測の事態の中で、いかに他者を理解し協力して過ごせるかを体験するのである。授業プログラムとしては、初日のグループ作りの場面で活用した。突然編成されたグループの中で、自己紹介をしたり、共同作業を行ったりする活動を通して、適度に精神的な負荷を感じつつ、その負荷を乗り越えていく心の強さや柔軟さを高めていった。子どもたちからは「活動を進めるたびにみんなの息が合ってきて楽しくなった。」「学年の違う友だちとも仲良くなれてよかった。」など、精神的な負荷を乗り越えて自信につながった様子がうかがえた。



【出会いの場面での活動】

イ 那珂市教育支援センター活動の実践

- 適応指導教室「ひまわり教室」におけるプログラム

体験学習プログラム①

～キッザニア東京体験～

現在集団不適応や不登校となっている児童生徒を対象に、体験型の学習機会を設定した。登校復帰や進学に向けて、学習することの意味や学習活動の先にある将来の生き方に目を向けさせることが目的である。自分の特性を自覚し、将来どんな大人になれるのか、体験を通してイメージをもたせることは、困難に直面した子どもたちに、それを乗り越える力の原動力につながると考える。

当日は小学生3名、中学生4名、通室生のOB（高校1年生）が1名、保護者1名の計9名が参加した。一人一人が希望する職業体験ブースに行き、思い思いの体験活動を行った。普段はあまり家族以外の人々とのふれあいが無い児童生徒が、係の担当者や初対面の参加者との協働体験を行うことができた。参加した子どもたちからは、「迷ったけど、思い切って参加してよかった。少し自分に自信が付いた。」「最初は緊張したけど、体験を繰り返すうちに、自然に他の人たちと話すことができた。」「将来、自分でやってみたいことが見つかった。」など、自分の行為行動を肯定的に受け止め前向きな気持ちをもてたという感想が聞かれた。



【初対面の友だちとの体験活動】

○適応指導教室「ひまわり教室」におけるプログラム

体験学習プログラム②

～工作教室・料理教室～

那珂市教育支援センター内の適応指導教室「ひまわり教室」では、通室している子どもたちの思いや願いをもとに、体験教室を開催している。ここでは工作教室と料理教室を紹介する。

工作教室では、講師として水戸生涯学習センターの大学生ボランティアを招いて、手の感触を活かして作り上げる活動を行った。内容はバルーンアートとフィンガーペインティングである。バルーンや絵の具を使い、手の

感触をいかして形あるものを作成していった。自分の意思と感触をもとに、意図した形に作り上げることは、思考力と想像力を伸ばすことにも役立つ。また、成功も失敗も自分の手作業の結果であるため、自己責任を高めることにもつながる活動となった。

料理教室の活動では、参加する子どもたちのリクエストで、寒天ゼリー作りを行った。出来上がったゼリーを、センターの職員と一緒に食べる姿からは、参加した子どもたちの「誰かに役立てた喜び」が感じられた。



【バルーンアート活動】

○保護者支援プログラム

不登校・登校しぶりの子をもつ保護者の会
～思いを共有する場の提供～

那珂市教育支援センター「麦の穂プロジェクト」の取組の大きな柱の1つに、配慮を要する児童生徒の保護者支援がある。センターには、来所相談や電話相談などを介して様々な相談が寄せられている。多くは不登校や登校しぶりに関する相談であるが、近年は発達に関する相談も増加している。それらの保護者は、ほとんどが子育てや子どもの進路に関する悩みや不安を抱え、孤軍奮闘している。センターでは、そんな保護者に対して、悩みを共有し互いに励まし合い、共感し合える場を提供している。参加を希望する保護者は年々増加しており、一度参加した保護者からは「参加してよかった。同じような悩みを抱えた方々と思いを共有できたことは今後の子

育ての励みなる。」等の感想が寄せられている。

○学校支援プログラム

学校希望研修

～配慮を要する児童生徒のケース検討会～

那珂市教育支援センターでは、教育委員会の指導室と連携を図り、心理の専門家から直接学校が個別のケースに対して指導・助言を得られる環境を提供している。平成28年度は8つの小中学校において、10人以上の配慮を要する児童生徒のケース検討会を実施した。主な主訴は不登校であるが、中には発達に課題が見られ、2次的に不登校に陥るケースも見られ、近年の不登校の変化を象徴するケースも見られた。また、不登校の背景にある家庭環境にも共通して課題が見られ、家庭環境が児童生徒の学校生活に与える影響の大きさを物語っている。

那珂市教育支援センターが対応する学校希望研修には2つのパターンがある。一つは茨城大学の心理専門の教員によるケース検討会で、もう一つは、センターの相談員やカウンセラーによる研修会である。茨城大学の教員による検討会は平成28年度に4回実施した。数多くの臨床例のある大学教員からの助言は、実例に基づいた即効性のある示唆に富んでいると好評である。一方のセンターの相談員やカウンセラーによる研修会は、随時学校からの希望に応じて実施ができた。また、1校が年間を通して継続的に複数回のシリーズで開催することも可能である。内容は、学校の実情に応じて、個別のケース検討会から、不登校の未然防止に関する職員研修、教育研究部の部員研修会など幅広いニーズに対応している。

②プロジェクトの達成状況

ア プロジェクトの全体運営

- ・本プロジェクトの推進にあたっては、全体の構造及び各種活動の企画立案につい

て、大学が指導することにより、学校教育における児童生徒が抱える心理的課題、または、その背景にある学校課題が明確になり、課題解決のための具体的活動計画の策定がスムーズに行うことができた。

- ・大学では、年間5回に渡り、実際に本プロジェクトに参加し、活動に応じた指導助言を行っている。それにより、活動全体の方向性の随時確認及び、具体的な学校支援を実行することができた。

イ 授業プログラムの成果

- ・レジリエンスを高める構成的グループエンカウンター（SGE）等を活用した授業プログラムを20ほど作成した。作成したプログラムは、本年度の事業概要とともに冊子にまとめて、市内小中学校へ配付した。
- ・本年度の授業プログラム実施校は、市内3つの小学校の4学級と、1つの中学校の1学級で実施した。
- ・成果としては、集団活動における他者との関わりの中で、自己の欲求が満たされない状況での「折り合い」のつけ方を実感し、他者を認めつつ自己を表現することの大切さに関する理解を深めることができた。

ウ 保護者支援活動

- ・平成28年度はH28年12月3日に那珂市教育支援センターで実施した1回だけであった。参加した保護者は、不登校児童生徒の子をもつ母親が3名であった。
- ・参加した母親からは「同じ悩みをもっている方がいることを知って、肩の荷がおりました。」「今後は親同士で連絡を取り合いたいと思います。」など、好意的な感想が出された。
- ・来年度は、早い段階で日時を周知して、複数回の実施を検討したい。

エ 学校支援活動

- ・学校支援事業としては2種類の活動を実施した。1つは、大学が指導助言を行う、ケース検討会である。今年度は、小学校3

校、中学校1校の合計4校にて実施した。

心理の専門家からの指導助言は、不登校児童生徒の支援に非常に有効であった。

- ・2つ目は、学校の要請による随時型の支援活動である。実施校は4校の小学校、3校の中学校である。支援の内容は、個別のケース検討会や職員を対象にした研修会である。依頼内容に合わせて、カウンセラーや相談員、指導主事等が参加して多様な支援を行うことができた。

オ 適応指導教室（ひまわり教室）活動

- ・那珂市教育支援センター内の適応指導教室「ひまわり教室」では、年間に10回以上の体験学習プログラムを行った。
- ・体験学習プログラムは、「ひまわり教室」で実施する「〇〇教室」型のもので、教室外で実施する校外学習型のものがある。
- ・「〇〇教室」としては、絵画・工作、調理、読み聞かせ、外国語活動、クリスマス会など、季節や発達段階を考慮して内容を随時検討して実施している。特色としては、活動の最後に必ず参加者の感想の交流会を実施することである。参加者が活動を通して感じた思いを自己開示することで、自己有用感や自己肯定感の向上につながるのがねらいである。
- ・校外学習では、今年度はじめて体験型テーマパーク「キッザニア東京」へ行った。不登校の児童生徒8名、保護者1名が参加した。自分で選び、自分で考え行動することを通して、自立に向けた意識の向上が図れた。

③今後の計画と課題

ア 事業を実施しての課題

○大学との連携

- ・大学との連携において、学生ボランティアの活用を、各種プログラム活動に十分にいかすことができなかった。
- ・プロジェクト全体の年間計画の変更にとも

ない、予算の執行について円滑に進められなかったため、那珂市教育支援センターと教育委員会が、年度当初に十分に大学と協議を行い指導助言をもとに企画立案を行う必要がある。

○事業内容の周知広報について

- ・那珂市教育支援センターが不登校未然防止の取組を推進していることを、保護者や学校の職員、当該児童生徒に積極的に周知し、プロジェクトの内容を理解してもらうことが重要である。そのためには、支援の内容等を、適切な情報媒体を活用して広報する必要がある。

○各種プログラム実施上の課題

- ・市内の不登校児童生徒及び、その予備軍と思われる児童生徒の人数と比較すると、今年度プロジェクトに関わった児童生徒の総数はわずかである。さらに多くの児童生徒及びその保護者を支援できるようなプログラムの開発が必要と考える。
- ・学校現場で、先生方や子どもたちが気軽に実施できるような授業プログラムが必要である。

イ 今後の計画

○大学との連携

- ・大学からのプロジェクト全体に関する方向性と具体的な取組について、指導助言を行う回数を可能な範囲で増やしていきたい。その上で、年度途中でのプログラムの内容や方向性の適宜修正を図っていきたい。
 - ・学生ボランティアの活用について、大学と那珂市教育支援センター双方のニーズとメリットを明確にした上で、さらに有効に活用していきたい。
 - ・年度当初に年間計画を綿密に練り上げ、適切な予算の執行を進めていきたい。
- ##### ○事業の広報活動
- ・那珂市教育支援センターが、不登校予備軍と言われる児童生徒の支援も実施していることを適切に周知広報していきたい。

- ・各種プログラムの内容や開催時期等を明記した，広報用のチラシやパンフレットを作成していく。

○各種プログラムの実施

- ・保健体育や道徳科，学級活動などの学習内容を精査し，授業プログラムとの併用が可能な教材づくりを進めていく。

○他市町村との連携

- ・水戸教育事務所や茨城町で実施している「ほっとステーション」活動と連携を図り，共同で実施できる企画を立ち上げ，双方のよさを共有しながら，児童生徒の支援にあたりたい。